

第3章 まとめ～トータルパッケージ試行の概要と今後の課題～

第1節 トータルパッケージ試行の概要

トータルパッケージは、平成11年度に企画し、平成12年度以降に順次開発を行ってきた。

また、平成12年度には開発したM-メモリーノートやMWS等について、障害者職業総合センター職業センターや広域・地域障害者職業センター、研究協力を賛同いただいた外部機関において、多くの研究協力者（障害者257名・健常者101名、計358名）の協力を得て試行を行ってきた。

これらの試行の状況を、表3-1-1にまとめた。

1. 障害者職業総合センターにおける試行

障害者職業総合センター職業センターでは、職業準備訓練や高次脳機能障害者のための職場復帰支援プログラム等の利用者を対象に、試行を行ってきた。

平成12年度には25名が、平成13年度には7名が、平成14年度には21名が、平成15年度には29名に上る障害者が当研究に参加された。

また平成15年度には、76名の健常者の研究協力を得て、標準化のためのデータ収集を行った。

2. 広域・地域障害者職業センターにおける試行

広域障害者職業センターでは、職業訓練の利用者を対象に試行を行ってきた。平成13年度には3名が、平成14年度には10名の障害者が当研究に参加された。

地域障害者職業センターでは、職業評価や職業準備支援事業（平成14年度までの職業準備訓練、自立支援事業を含む）、職場適応援助者による支援事業（平成13年度までの職域開発援助事業を含む）等の利用者を対象に、試行を行ってきた。

平成12年度には2箇所の地域センターで3名が、平成13年度には10箇所の地域センターで23名が、平成14年度には15箇所の地域センターで48名に上る障害者が当研究に参加された。

また、平成15年度7月には、全国の広域・地域障害者職業センターにトータルパッケージを送付し、多くの障害者に職業リハビリテーション・サービスを提供する中で活用されている。平成15年度には5箇所の地域センターに研究協力をいただいたが、すでに職業リハビリテーション・サービスの中でトータルパッケージを活用されているため、事例の収集ではなく地域センター事業の中での活用例をとりまとめた。

3. 外部機関における試行

当研究では、多くの外部機関が研究に協力された。

平成 13 年度には 6 箇所の外部機関で 25 名の障害者と 18 名の健常者が、平成 14 年度には 10 箇所の外部機関での 46 名の障害者と 7 名の健常者が、平成 15 年度には 8 箇所の外部機関で 26 名の障害者が、当研究に参加された。

表 3-1-1. これまでに当研究に協力頂いた関係機関および研究協力者数

H12	総合センター		地域・広域センター		外部機関				
	対象者	健常者	No	地域センター名	対象者	No	機関名	対象者	健常者
	25		1	青森障害者職業センター	2				
			2	和歌山障害者職業センター	1				

H13	総合センター		地域・広域センター		外部機関				
	対象者	健常者	No	地域センター名	対象者	No	機関名	対象者	健常者
	7	0	1	国立職業リハビリテーションセンター	3	1	名古屋市立総合リハビリテーションセンター	13	
			2	北海道障害者職業センター	1	2	横浜市立総合リハビリテーションセンター	0	
			3	山形障害者職業センター	2	3	京都大学医療短期大学・京都大学付属病院	1	18
			4	茨城障害者職業センター	1	4	大阪府身体障害者医療福祉センター	0	
			5	千葉障害者職業センター	2	5	市川市保健医療福祉センター 市川市リハビリテーション病院	0	
			6	神奈川障害者職業センター	1	6	医療法人 沖繩徳州会 千葉徳州会病院	11	
			7	長野障害者職業センター	1				
			8	三重障害者職業センター	1				
			9	京都障害者職業センター	2				
			10	大阪障害者職業センター	2				
			11	岡山障害者職業センター	1				

H14	総合センター		地域・広域センター		外部機関				
	対象者	健常者	No	地域センター名	対象者	No	機関名	対象者	健常者
	21	0	1	国立職業リハビリテーションセンター	9	1	大阪府立身体障害者福祉センター	1	
			2	国立吉備高専職業リハビリテーションセンター	1	2	三重県身体障害者総合福祉センター	8	
			3	北海道障害者職業センター	2	3	名古屋市総合リハビリテーションセンター 職能開発課	6	
			4	青森障害者職業センター	3	4	横浜市総合リハビリテーションセンター	0	
			5	群馬障害者職業センター	4	5	京都大学医療技術短期大学部作業療法学科	3	7
			6	千葉障害者職業センター	1	6	川崎市リハビリテーション医療センター	0	
			7	埼玉障害者職業センター	4	7	社会福祉法人 桜葉会 つがの工房	10	
			8	東京障害者職業センター	9	8	精神障害者地域生活支援センターのぞえ「風と虹」	6	
			9	神奈川障害者職業センター	1	9	医療法人 沖繩徳州会 千葉徳州会病院	3	
			10	新潟障害者職業センター	3	10	市川市リハビリテーション病院	9	
			11	岐阜障害者職業センター	3				
			12	三重障害者職業センター	2				
			13	京都障害者職業センター	1				
			14	大阪障害者職業センター	4				
			15	奈良障害者職業センター	5				
			16	高知障害者職業センター	2				
			17	福岡障害者職業センター	4				

H15	総合センター		地域・広域センター		外部機関				
	対象者	健常者	No	地域センター名	No	機関名	対象者	健常者	
	29	76	1	埼玉障害者職業センター	1	1	大阪府立身体障害者福祉センター	3	
			2	新潟障害者職業センター	2	2	三重県身体障害者総合福祉センター	2	
			3	長野障害者職業センター	3	3	名古屋市総合リハビリテーションセンター 職能開発課	16	
			4	京都障害者職業センター	4	4	横浜市総合リハビリテーションセンター	0	
			5	大阪障害者職業センター	5	5	京都大学医療技術短期大学部作業療法学科	0	
					6	6	川崎市リハビリテーション医療センター	0	
					7	7	社会福祉法人 桜葉会 つがの工房	5	
					8	8	市川市リハビリテーション病院	0	

4. まとめ

以上のような研究協力の成果や当研究における開発の成果については、多くの学会や研究会等の機会を活用し発表してきた。

トータルパッケージに関連した発表数をあげると、平成 12 年度には 2 つの学会等に参加し 7 つの発表を、平成 13 年度には 3 つの学会等に参加し 9 つの発表を、平成 14 年度には 6 つの学会等に参加し 18 の発表を、平成 15 年度には 5 つの学会に参加し 24 の発表を行ってきた。

これらの発表を行う中で、福祉機関や医療機関、教育機関等の多くの方の関心を集め、情報提供を行ってきた。

表 3-1-2. トータルパッケージに関連して行った学会等の発表(1)

1. 平成 12 年度職リハ研究発表会 (第 8 回)	
1. 高次脳機能障害に対する職業リハビリテーションにおける Wisconsin Card Sorting Test の利用 (1)	
2. 高次脳機能障害に対する職業リハビリテーションにおける Wisconsin Card Sorting Test の利用 (2)	
3. 記憶障害を有する高次脳機能障害者へのメモリーノート訓練	
4. 高次脳機能障害に対する作業評価課題の作成 ～事務的作業と OA 機器を利用した作業～	
5. 職業準備訓練における構造化に対する試み(3)～作業指導における構造化とその成果～	
6. 職業準備訓練における構造化に対する試み(4)～作業指導における構造化の基本的考え方～	
2. 平成 12 年度行動分析学会	
7. 高次脳機能障害者への職業リハビリテーションにおけるメモリーノート訓練	
1. 平成 13 年度職リハ研究発表会 (第 9 回)	
1. 高次脳機能障害者等に対する作業評価課題の試行状況について (1)～健常者への実施～	
2. 高次脳機能障害者等に対する作業評価課題の試行状況について (2)～高次脳機能障害者への実施～	
3. 高次脳機能障害者等に対する作業評価課題の作成 (2)	
4. 高次脳機能障害者に対する職場復帰支援プログラムの取り組みについて ～課題分析に基づく対象者への支援の実際～	
5. 高次脳機能障害者に対する職場復帰支援プログラムの取り組みについて～事業主支援の実際～	
2. 平成 13 年度職リハ学会	
6. 障害者職業総合センターにおける高次脳機能障害者に対する職場復帰支援プログラム (1)	
7. 障害者職業総合センターにおける高次脳機能障害者に対する職場復帰支援プログラム (2)	
3. 平成 13 年度行動分析学会	
8. 脳外傷者への職業リハビリテーションにおける作業評価課題の開発 (1)	
9. 脳外傷者への職業リハビリテーションにおける作業評価課題の開発 (2)	
1. 平成 14 年度職リハ研究発表会 (第 10 回)	
1. 作業評価課題における簡易版の作成と試行	
2. 作業評価課題における障害別エラー分析 (1)	
3. 作業評価課題における障害別エラー分析 (2)	
4. 作業評価課題の開発と試行～実務作業と検索修正作業～	
5. 障害者の職場適応促進支援のためのトータルパッケージ	
6. M-ストレス・疲労アセスメントシートの作成	
7. 高次脳機能障害者に対する「M-ストレス・疲労アセスメントシート」の試行	
8. 精神障害者に対する「M-ストレス・疲労アセスメントシート」の活用方法	
9. M-メモリーノートの改訂と作業場面・日常場面での応用	
10. 高次脳機能障害者に対する職場復帰支援プログラムにおける事業主支援の実際	
2. 平成 14 年度認知リハ研究会	
11. 職業リハビリテーションにおける WCST の利用 ＝高次脳機能障害者と精神障害者への実施事例を通して＝	
12. 職業リハビリテーションにおけるメモリーノートの訓練と般化	

表3-1-2. トータルパッケージに関連して行った学会等の発表(2)

3. 平成14年度精リハ学会	
13.M-ストレス・疲労アセスメントシートの開発	
4. 平成14年度職リハ学会	
14.障害者への作業評価課題の開発と試行(1)「職場適応促進のためのトータルパッケージ」の導入	
15.障害者への作業評価課題の開発と試行(2)	
5. 平成14年度失語症学会	
16.記憶障害への職業リハビリテーションにおけるメモリーノートの活用	
17.職業リハビリテーションにおけるWisconsin Card Sorting Testの活用	
6. 平成14年度行動分析学会	
18.職業リハビリテーション・サービスにおける課題分析	
1. 平成15年度職リハ研究発表会(第11回)	
1.高次脳機能障害者に対する職場復帰支援プログラムにおける事業主支援 ～「職場復帰に向けた情報提供と職務再設計」～	
2.作業評価課題における健常者データの収集と分析(1)	
3.作業評価課題における健常者データの収集と分析(2)	
4.作業評価課題におけるエラーと補完手段に関する検討	
5.職場適応促進のためのトータルパッケージにおけるグループワークの機能と効果	
6.職場適応促進のためのトータルパッケージにおけるM-メモリーノート作業用リフィルの活用	
7.職場適応促進のためのトータルパッケージにおけるMSFASの活用と効果	
8.障害者職業センター等における「職場適応促進のためのトータルパッケージ」の活用状況	
9.職業リハビリテーションにおける課題分析技法の整理と活用	
10.MSFASの開発と活用促進に向けた課題分析リストの整備	
11.高次脳機能障害者の易疲労性に対する支援	
12.高次脳機能障害者に対する職場復帰支援プログラムにおける多様な職種への取り組みー物品倉庫管理作業の課題分析と模擬講習の一事例ー	
13.高次脳機能障害者に対する職場復帰支援プログラムにおけるトータルパッケージの実践的活用方法について	
2. 平成15年度認知リハ研究会	
14.高次脳機能障害者を想定した職務の課題分析例	
15.作業評価課題におけるエラーと補完手段に関する分析	
3. 平成15年度精リハ学会	
16.精神障害者に対するストレス・疲労のマネジメントトレーニングの試み	
17.MSFASとストレス・疲労のセルフマネジメント	
4. 平成15年度職リハ学会	
18.職業リハビリテーションにおけるWisconsin Card Sorting Testの活用に関する総合的検討	
19."障害者に対する「職場適応促進のためのトータルパッケージ」の試行(1) ～抑うつ状態の強い高次脳機能障害者への試行～"	
20."障害者に対する「職場適応促進のためのトータルパッケージ」の試行(2) ～易疲労性という特徴をもつ精神障害者への試行～"	
21.M-メモリーノートにおける情報整理のための集中訓練の有効性	
22.作業評価課題におけるエラー分類ー実務作業課題を中心にー	
5. 平成15年度行動分析学会	
23.MSFASにおける課題分析リスト	
24.就労場面における課題分析の実務的手法	

第2節 今後の課題

当研究では平成 11 年度から 15 年度までの 5 年間で、精神障害者と高次脳機能障害者を中心に、様々なツールを開発すると共に、効果的・効率的な職業リハビリテーション・サービスの一つの総合的な方法として、「職場適応促進のためのトータルパッケージ」を提案し試行し、研究をとりまとめるに至った。

一方で、平成 13 年度に厚生労働省による高次脳機能障害支援モデル事業が実施され、全国 12 カ所の地方自治体と拠点施設の専門家が参加し、基礎的データを収集、分析し、診断基準や標準的訓練プログラム等の作成を計画している。精神障害者についても、厚生労働省では「精神障害者の雇用の促進等に関する研究会」において検討が進められているが、この議論の中では、現在在職中の気分障害を有する者への職業リハビリテーション・サービスのニーズがあげられている。また、高機能自閉症者等、様々な発達障害者への職業リハビリテーションにおける指導・支援の構築に対するニーズも高まっている。

さらに、職業リハビリテーションの現場では、ジョブコーチによる支援に対するニーズが年々高まっており、障害者雇用のための事業主への支援方法の構築も大きな課題となっている。

このような状況を踏まえ、トータルパッケージの到達点と今後の課題について整理する。

1. 対象障害の拡大

トータルパッケージは、高次脳機能障害者や精神障害者への試行を重ね、補完方法の必要性やストレス・疲労への対処行動の必要性と、その確立のための支援方法を検討してきた。これらの知見は、数例の知的障害者やその他の発達障害者への適応も試みたが、現在十分な事例検討を行える段階ではない。

そのため、今後、トータルパッケージの中で獲得できる様々な職業生活のためのスキルが、どのような障害種別にとって有意義なものとなるのかを検証していく必要がある。知的障害者はもとより、高機能自閉症者等、発達障害のある障害者への適用可能性について検証することは今後の重要な課題の一つである。

2. トータルパッケージと家族との連携

高次脳機能障害者や精神障害者の職業生活を支えるためには、事業所の理解や専門家によるサービスだけでなく、常時、継続的な支援を行えるよう家族が支援者としての機能を果たすことが必要であると考えられる。しかし、「トータルパッケージ」は、対象者への支援を中心に構築された方法論であり、現状では専門家への技法情報として新たな視点と方法を提供しているにすぎない。今後の職業リハビリテーションにおいて、さらに効果的なサービスとして「トータルパッケージ」を活用していくには、家族の障害理解の促進や、家庭における職業リハビリテーションの課題改善支援のための技法を開発する

ことが必要であろう。また、このような家族への支援は、教育や福祉の現場でも活用できる指導・支援技法となることが望ましいものである。

つまり、家庭や福祉・教育の現場で職業リハビリテーションを念頭においた支援を構築するための方法論の構築が一つの課題としてあげられる。

3. トータルパッケージと事業所との連携

多くの復職を目指す高次脳機能障害者に対し試行を行ってきた結果からは、トータルパッケージは事業所内で生じうる問題を予測し、それらに対する防止策を対象者への職業リハビリテーション・サービスとして効果的に実施しうることが明らかとなってきた。また、対象者への職業リハビリテーション・サービスの経過は、事業所の環境整備においても有意義な情報を提供できることを示している。

しかし、事業主が障害者を採用・配置し、適切な雇用管理を推進するには、職場内での障害についての理解の促進や教育訓練の充実、職場定着を支援する方法を事業所環境に合わせて構築することが必要となる。そのためには、個々の事業所の環境や業務に応じた、障害者に適した職務や教育方法、職場環境の構築に向けた、環境に対する職業リハビリテーション・サービスの開発が、さらなる課題と考えられる。

4. 標準化に向けた活動

トータルパッケージの機能充実のため、健常者への試行結果をとりまとめた。しかし、MWS 等は職業経験の有無や年齢等による影響が大きい。そのため、MWS 等の標準化のためには、さらに多くの健常者データが必要となる。トータルパッケージの機能を最大限に活かすためにも、十分な健常者データの収集は課題の一つである。

このような幾つかの検討課題は、トータルパッケージの汎用性を高めていく研究活動が必要であることを示唆している。

終わりに

本研究の主要な成果となった「トータルパッケージ」は、いうならば、わが国の職業リハビリテーション領域で生み出された3番目の汎用ワークサンプルシステムといえよう。

最初のものは、旧雇用促進事業団によって開発され、地域障害者職業センターに配備された、主に知的障害者向けの軽作業主体のシステム、次に、米国 ICD 社との提携の下で、国立職業リハビリテーションセンターで開発されたマイクロタワー日本版があり、これには評価機能に留まらない米国のノウハウが込められていた。そして、今度の「トータルパッケージ」ということになる。

ワークサンプル法の歴史を見ると、アメリカの職業リハビリテーションの誕生とともに発展を始め、1980年代にかけて全盛期を迎えた職業リハビリテーションの技法とされる。アメリカでは20種類が市販されていたことから理解されるように、すべてが、画一的な診断・評価機能を果たす道具ではない。近年の職業リハビリテーションの潮流の中で、有効性が発揮できず、役割を終えたシステムも多いが、依然として、貴重な役割が与えられているシステムも見られる。

ワークサンプル法に限らず、技法の開発において重要なのは、その果たし得る機能がニーズに合致し、期待される役割を果たせるかどうかということである。

わが国のリハビリテーションの状況を、10年前と比べると、その様変わり著しい。複雑な障害特性が認められる精神障害者、高次脳機能障害者、広汎性発達障害者等が主要なユーザーとなりつつあり、職場での直接的な支援手法としてジョブコーチ制度が拡充され、関連の地域資源とのネットワークによる地域ベースのリハビリテーションが喧伝されている。

そうした状況の中で、今後重要な役割を果たすべく開発を行ったのが「トータルパッケージ」である。その名が表すように、ワークサンプルだけが重要な役割を果たす訳ではない。MSFAS やメモリーノートなどのユニットは単独でも、十分な役割を果たし得るが、ユニット同士を組み合わせ利用し、効果を強め合うことによって、さらに大きな役割が期待できるというものである。

職場での直接的支援サービスが主流化する中で、「トータルパッケージ」は、第一義的には施設内評価・訓練キットであり、プログラムに取り込まれることを目指している。職場への参入に先だって問題点を十分に把握し、問題発生を予防する訓練を行うことは、今後、リハビリテーションの主要な場ともなる事業所がこうむる不利益を未然に防ぎ、また、職場で発生した問題点の解決方法を実証的に検討し、解決する場面を提供するものである。そのためにワークサンプルとそれぞれのユニットが機能することになる。

「トータルパッケージ」には、新しい考え方や方法論が採用されている。ストレスマネジメント、コーピング、課題分析、般化、システムティック・インストラクションなどの概念を使用し、パソコンの利用による効率化も最大限に行っている。言うならば、最新装備を備えたワークサンプルである。

かつての判定評価のように一方的な評価を目指すのではなく、障害状態の認知に向けて当事者とと

もに評価を行い、当事者が挑戦することがらと、支援者の支援すべき方向を明らかにしようとするものであると言えよう。

開発の経過を振り返ると、精神障害者への支援ツールとして考えたものと、高次脳機能障害者への手法として考えてきたものとを、途中で統合を図ったことが大きな意義と成果に繋がってきたと言える。医学リハビリテーションから始まるサービス体系は、ともすれば障害別の形になり易いが、リハビリテーションにおける傾向を眺めると、手法やツールを利用する細かいノウハウは違っても、そのニーズという点からは共通なものに辿り着く可能性が高い。今回の経過は、障害者職業総合センターの研究領域の設定にも表わされているように、「ヒューマンサービスとしての職業リハビリテーションは、ニーズの分類にこそ従うべき」という方向を図らずも具体化することにもなった。

「トータルパッケージ」の開発は報告書に示したように、ここで、ひと区切りをつけているが、開発者側の責任は今後とも果たしてゆく必要があると考えられる。

本研究では、「トータルパッケージ」の他に、職業リハビリテーションの現場で役立つ解説書として「職業リハビリテーションのための評価技法ハンドブック」を完成した。本書は、職業リハビリテーション分野で専門的な業務を行う人々に、評価方法及び検査（道具）について、基礎的な情報を提供し、実務において参考書として活用されることを意図している。CD-ROMでの提供によって情報検索が容易に、効率的になると期待される。また、評価バッテリーを組む際の考え方などもまとめている。

今回、作成した数量については、著作権者の許諾を得ているが、それを超えた広汎な配布のためには、解決すべき課題が残っている。

「トータルパッケージ」と「職業リハビリテーションのための評価技法ハンドブック」が十分に活用されて、職業リハビリテーション・サービスの向上に資することが、開発に当たった、評価・相談研究部門の担当者たちの念願である。そして、これらを効果的に利用した情報がフィードバックされ、研究が活性化され、深められることを期待するものである。

